

第1章

研究の概要（総論）

「質の高い学び」の創造

～資質・能力の育成に向けた各教科等の学びのグランドデザイン(最終年次)～

概要

本校の1年次研究では、「質の高い学び」の実現を促す方策について、「『意欲』から『意味』への転換」「知識発見から知識構築のプロセス」「知識や最適解を他者と創るプロセス」「『学び方』を学ぶ自己調整的な学び」という4つの視点を手掛かりとし、各教科等の本質を捉えつつ研究を推進してきた。また2年次では、前述の4つの視点を踏まえつつ、相互の関連やつながり、連続性に注目して、さらに研究を深めた。こうした実践研究からは、生徒の学びの質の高まりを確実にみることができるようになってきた。最終年次では、個々の学び相互の関連やつながり、連続性に注目しつつ、単元や題材のレベルにおいて生徒の学びや評価をひとまとまりのものとして捉えるべく、研究を深めていく。

キーワード：連続性、非認知能力、主体的に学習に取り組む態度、資質・能力、協働

1. はじめに～1・2年次研究の取組と目指す生徒像

1. 1. 本校研究で目指す生徒像と研究主題

中央教育審議会答申における「令和の日本型学校教育」の構想(2021)においては、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つの側面に整理しており、そのうち「学習の個性化」については、「一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する」とある*1。

本校では、学校の教育目標を「よく見、よく聞き、よく思い『自立をめざす生徒』と掲げている。これからますます複雑化・多様化する社会の中で、種々の事象や課題に主体的に向き合い、試行錯誤の中で解決に向かうことこそが真の「自立」であり、それが本校の生徒の目指す姿であると考えている。これを学習のレベルで捉えるならば、自らの学習を自らがその都度調整できることを目指す必要があると考えられる。

また、その教育目標を具現化した「目指す生徒像」として本校が設定しているのが以下である。

- ・常に知を探究し、創造する生徒(知)
- ・豊かな心をもち、他を思いやる生徒(徳)

- ・強健な身体を養い、たくましく生きる生徒(体)

このうち、主として本校研究で目指すのは、知の側面である「常に知を探究し、創造する生徒」の育成であることは、これまでの紀要でも述べているところである。

そのためには、いっそう「質の高い学び」の実現が求められると考え、今次研究の主題を「『質の高い学び』の創造」とした。このことについては、学習指導要領解説の総則編にも、「教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童の状況等に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、**質の高い学びを実現し**、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることが求められている»*2と示されている。

そこで、本校では次の主題を掲げ、これまで2年間研究を推進してきたところである。

「質の高い学び」の創造

1. 2. 研究副主題の設定と成果(1年次)

1年次研究では、学びの質を高めるにあたって以下の4つの視点が重要であると捉え、これらをベースに理論構築し、実践研究を推進した。

- ア. 「意欲」から「意味」への転換
- イ. 知識発見から知識構築のプロセスへ
- ウ. 知識や最適解を他者と創るプロセス
- エ. 「学び方」を学ぶ自己調整的な学び

上記4つの視点全てが重要であることや、これらが独立したものでなく、複雑に絡み合っていることをおさえて、各教科等においては、これらのいずれかに重点をおいて研究を進めてきた。

ところで、この4つの視点をベースとした実践は、各教科等の本質を踏まえたうえで行われなくてはならないし、各教科等における資質・能力の育成を目指すものでなくてはならない。そこで、1年次研究の副題を以下に設定した。

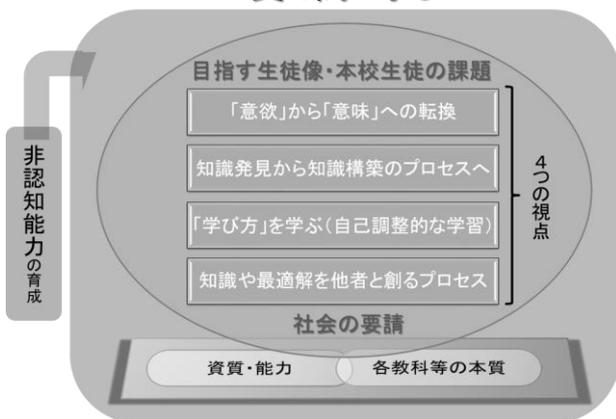
「質の高い学び」の創造(1年次)
 ～4つの視点を手掛かりとした各教科等の方策～

そのうえで、どの教科等においても、「4つの視点」を基軸として理論構築をし、具体的な手立てを講じることで、より学びの質が高まることが明らかになり、一定の成果を得ることができた。

また、「4つの視点」に加えて、各教科の見方・考え方を踏まえて各教科等の本質に迫ったり、基盤や基本となる資質・能力を捉え直したりしながら研究を進められたことも、1年次研究の大きな成果といえる。

さらには、個々の学びを支えている非認知能力やその働きについて見つめ直すことで、学びに粘り強く取り組む姿勢や、自己調整的に学びを進めていくことが不可欠であると再確認できたことも、成果の一つである。

質の高い学び



1年次研究における「質の高い学び」の研究構造図

1. 3. 研究副主題の設定(2年次)

1年次研究では、前述のような成果の一方で、どの教科等においても、「一単位時間における研究の成果のみならず、単元同士をどのように構成し、また単元相互を関わらせていくか」ということについてもビジョンをもつ必要があることがわかった。

また、1年次では4つの視点を焦点化して研究を進めてきたが、その中でも「知識構築のプロセス」や「他者と最適解を創るプロセス」においては、おのずと「対話」の重要性が問われることも明らかになった。

文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(平成30年6月5日)において、「他者との対話の中で行われる仕事は、AI やロボットによってある程度代替されながらも、人間が担うことで、それとは異なる付加価値が生まれると考えられる。」*3 とあることから、対話の重要性がわかる。1年次研究においても、各教科等の諸々の学習活動において適宜生徒同士の対話を盛り込むよう工夫し、場面によっては対話を活性化させることができたし、それによる学びの深まりを見ることもできた。しかしながら、それら個々の対話がどのように機能し、他の学習形態とどのような差異を生んだかということについて、明らかになったとはいえない。

さらに、全ての教科等で「4つの視点」を踏まえ研究を進めているにも関わらず、それらを軸に教科等の連携を図れていない現状があった。カリキュラム・マネジメントが求められる時代にあって、「4つの視点」を手掛かりに、学びのプロセスをより多くの教科等で共有することができれば、学校全体として組織化された教科研究が進められ、結果としてより質の高い学びを促すことができると考えている。

以上3つの課題から見えてくるのが、単元や生徒同士、そして他教科との「つながり」や「連続性」への展望である。それらを基に今後の研究を進めることが、1年次研究を前進させるために必要なことであると考えた。

そこで2年次研究では、より質の高い学びを目指すために、様々なレベルにおいて、学びのつながり、すなわち「連続性」を重視するべきであるという視座に立ち、研究を進めることとした。

この「つながり」の要素として2年次研究で重視したの

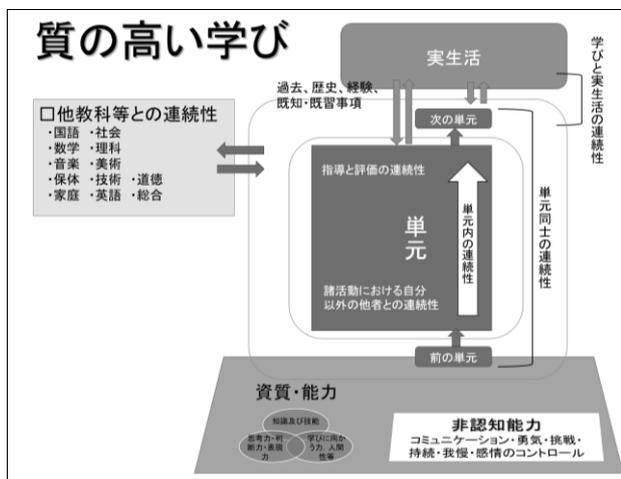
は、以下である。

- ①教室の学びと実生活とのつながり
- ②学びの縦(単元・題材同士)のつながり
- ③学びの横(教科等間)のつながり
- ④学びの場面での他者とのつながり
- ⑤指導と評価のつながり
- ⑥個々の資質・能力同士のつながり

これらのいずれかを重点的に、または複数の視点を総合的に捉え、単元や題材を構成して実践することが、ひいては学びの質を高めることにつながると捉え、2年次研究の副題を以下のように設定した。

「質の高い学び」の創造(2年次)
 ～4つの視点を踏まえ、学びの連続性を生む
 各教科等の方策～

さらにそのうえで、各教科等において、1年次研究で少々触れた「非認知能力」の育成のための方策についてもより深く模索した。それらを包括した2年次研究の研究構造図が以下である。



本校2年次研究の「質の高い学び」構造図

この図に示したような構造を元にして「質の高い学び」を創出するために、各教科等で具体的な実践を積み重ねた。

その結果、「連続性」への焦点の当て方は教科等の特性に応じて様々であったものの、主に「単元や題材同士の連続性」「既習事項との連続性」「実生活との連続性」等、現前の学びと様々な要素との関連の中で、生徒の学びをより質の高いものにすべく、単元や題材全体をデザインすることができたと考えている。

2. 最終年次の研究

これまでの2年間の研究では、前述の成果を上げることができた。その一方で、各教科等からは、以下のような課題(一部)が挙げられている。

国語	主体的に学習に取り組む態度の育成や見取り
社会	協働場面における生徒の思考の把握・評価
数学	自己調整力をより高める工夫
理科	「ALACT モデルに基づいた振り返りシート」と「主体的に学習に取り組む態度」の関係づけとその見取り
音楽	歌唱領域における「理解」や「思考」と「技能」のレベルのかい離
美術	造形的な視点を取り上げることによる表現と鑑賞とのつながり
保体	「必要感」を「実践」につなげる手立て
技術	教科等を横断させて技術の問題を解決する生徒の姿のループリク化
家庭	指導と評価の一体化
英語	コミュニケーションの質を高めるための方略

教科等による特質があることから、これらを一様に捉えることは難しいが、共通項が透けて見える部分もある。例えば、「主体的に学習に取り組む態度」や「自己調整」・「振り返り」などの言葉からは、評価の第3の観点をどう扱うかという課題が見えるし、「協働」や「必要感」・「コミュニケーション」などの言葉からは、「非認知能力」の育成についての課題を見て取ることができる。

これまで2年次で研究した内容、とりわけ「つながり」をベースにしつつ、これらの課題をクリアすべく、包括的に研究を進めることが、最終年次研究に求められることであろう。

2. 1. 各教科が焦点化する資質・能力

最終年次の研究にあたり、各教科等では、学習指導要領で示されている事柄や、これまでの課題、さらには本校生徒の実態に応じて、「育成すべき資質・能力」(目指す生徒像)を以下のように捉え直している。

国語	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の言葉の学びを客観的に捉えることのできる生徒 ・ICT 機器の利活用を通して、他者と表現・共有し自らの学びを深めることのできる生徒
----	---

社会	<ul style="list-style-type: none"> ・単元や分野のつながりを意識して課題を解決し、より良い社会の実現につなげる生徒 ・他者との協働を生かして自らの考えを構築し、学びを深める生徒
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら感じた様々な疑問や問いから問題として定式化し、領域や単元のつながりを基に問題を解決したり、他に問題解決に生かしたりする生徒 ・さらに自己調整力を高め、自らの学習状況をより客観的に捉えて学習意欲を喚起する生徒
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的にリフレクションすることで、探究の過程において必要な見通しと振り返りを自ら行うことのできる生徒 ・自らの学習のプロセスを他者と対話することで客観的に捉えることのできる生徒
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の学びを振り返ったり生かしたりしながら、音楽的な見方・考え方を働かせ、学びを広げたり深めたりすることができる生徒 ・ICT機器を効果的に活用し、音楽を介して他者と協働しながら学ぶことができる生徒
美術	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの学びとのつながりに気付き新たな知識を積み上げる生徒 ・他者と意見を交流し、新たな価値を受け入れることができる生徒
保体	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の特性を踏まえ、思いや考えを大切にしながら意欲的にスポーツに関わることのできる生徒 ・既存のきまりやルールにとらわれず、課題を解決しようとする事のできる生徒
技術	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びを創造することができる生徒。 ・協働により、適切に問題解決ができる生徒。
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の学びを振り返りながら、粘り強く追究できる生徒 ・自己の個性を生かしつつ、他者と関わることで、より効果的に問題解決できる生徒
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・場面や状況を判断し、効果的な方略を取り入れ意思伝達することができる生徒 ・ICT 機器を活用した継続的な自己モニタリングを通じて、学びを深めることができる生徒

資質・能力をこのように整理し直すことで、目の前の生徒に身に付けさせたい力がより明確になり、それに伴って各教科等における単元や題材の全体像(以下、グラ

ンドデザイン)を効果的に描くことができると想定している。

以下からは、前述したこれまでの課題や、各教科等で育成すべきであると捉えた資質・能力(目指す生徒像)を踏まえつつ、最終年次研究における単元・題材のグランドデザインについて述べていく。

2. 2. 「非認知能力」の捉え直し

前述の通り、本校の最終年次研究においては、これまでの研究を総合的に捉えたグランドデザインを描くことが重要であると考えている。それがひいては学びの質を高めることにつながると考えられるためである。

1年次研究からこれまで、学びの質を高めるための土台と考えてきたのが「非認知能力」を育成することである。これは、評価の3つの観点、とりわけ第3の観点である「主体的に学習に取り組む態度」と深く関係していると考えられる。「2. 1.」で挙げた各教科等が焦点化している資質・能力の中にも、「自らの学びを客観的に捉え」「他者との協働を生かし」「効果的にリフレクションする」「効果的な方略を取り入れ意思伝達をする」等、大きく捉えれば「非認知能力」の育成が鍵となるものが多くみられる。

その一方で、これまでの研究では、「非認知能力」自体、その姿が見えづらかったこともあり深く追究できていないくらいがあった。

そこで最終年次研究で「非認知能力」をよりつぶさに捉え、単元・題材の土台にあるものとして、また「主体的に学習に取り組む態度」にアプローチするきっかけとして、各教科等の全体構想に組み入れていきたいと考えている。

2. 2. 1. 様々な文脈における「非認知能力」

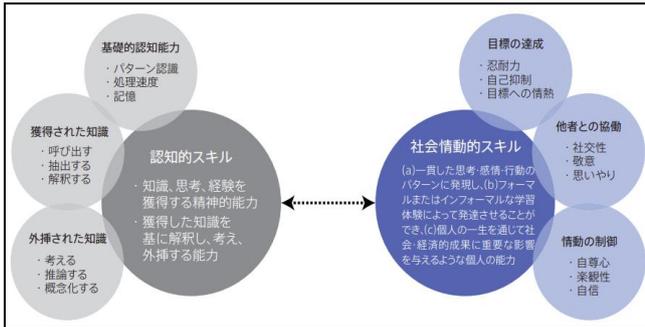
「非認知能力」は、様々な文脈で捉えられている。元を辿れば、ゴールドバーグ,L.R, (1990)の「ビッグ5パーソナリティ」がその原型であると考えられ、これは①外向性②情緒安定性③開放性④協調性⑤勤勉性(誠実性)と整理されている^{*4}。これは単に学習の文脈のみならず、家庭や社会生活においても必要とされる力である。

最近では、例えば小塩真司(2021)は、「非認知能

力)を「思考や感情や行動について個々人がもつパターンのようなもの」*5として捉え直している。

またヘックマン(2015)は、「意欲、長期的計画を実行する能力、他人との協同に必要な社会的・感情的制御など」*6が非認知能力であり、社会構成的な文脈においてこれを捉えている。

さらに OECD(2015)では、認知的スキルと対になる概念として「社会情動的スキル」について述べており、以下のようにまとめている。*7



認知的スキル、社会情動的スキルのフレームワーク

このフレームワークは、特に先に述べた「ビッグ5パーソナリティ」を元としている。*8

2. 2. 2. 本研究における非認知能力の整理

以上の他にも、「GRIT」「EQ(心の知能指数)」「グロース・マインドセット」等、様々な文脈において述べられている「非認知能力」であるが、より抽象化し、単純化したものでなければ、学校教育における実践研究に溶け込むものとはならないと考える。

そこで、本研究では中山芳一(2020)が整理した「非認知能力」を実践研究のベースに用いることとした。中山は、「非認知能力」を3つの側面に整理している。

- | |
|---------------------------|
| A. 自分を高める力(対自的変革・向上系能力群) |
| B. 自分と向き合う力(対自的維持・調整系能力群) |
| C. 他者と関わる力(対他的協調・協働系能力群) |

Aは、例えば「意欲や向上心」、Bは「自制心や忍耐力・レジリエンス(回復力)」、Cは「協調性や社交性・コミュニケーション力」などである。

このように整理し、意図的かつ系統的に、単元や題材の学習においてアプローチする手立てを組み込むことで、「非認知能力」を育てることができると考える。

2. 2. 3. 非認知能力の必要性～本校生徒の実態

では、そもそもなぜ「非認知能力」の育成が必要であるのか。先にも述べたように、これまでの2年間の研究を経て各教科等が設定し、高めるべきとした資質・能力の育成につながるものであるから、というのは間違いない。

一方で、「非認知能力」に関する本校生徒の実態として、以下のようなデータがある。

非認知能力		本校3年生の昨年のデータ (道徳性アセスメントシステム「HUMAN」)	
能力群	具体	内容項目	回答の割合%
自分を高める力	意欲・向上心	向上心 個性伸長	43(1)
	自信・自尊心	該当項目なし	
自分と向き合う力	自制心・忍耐力	節度・節制	33(1)
	回復力	希望勇気克己意志	40(1)
他者とつながる力	協調性・社交性	思いやり、感謝	49(1)
	コミュニケーション力	相互理解、寛容	35(1)

※数値は、最も肯定的に回答した割合
※↑は全国平均との比較

右は、本校第3学年の生徒に対して行った「道徳性アセスメントシステム『HUMAN』」の結果の一部である。前述の「非認知能力の3つの側面」と項目を並べて照らし合わせてみたところ、5つ中4つの項目において全国平均を下回った。このことから、本研究において「非認知能力」を高めるための手立てを講じる必要があることがわかる。

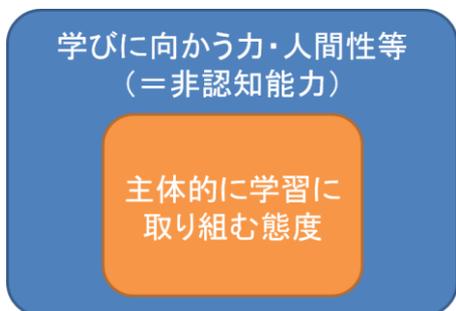
2. 2. 4. 非認知能力の必要性～社会の要請

「非認知能力」に類する(原型となる)概念として、先ほど OECD の「社会情動的スキル」について述べたが、OECD(2015)では、「文部科学省は、新しいスキルのフレームワークを作成し、将来の教育の目的、学習指導要領、児童生徒の評価を議論するため、『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会』を設置した。検討会の議論には、自主性、対人スキル、他者と協働する能力、問題を解決し新しい価値を生み出す能力、学びに向かう力(中略)などの将来必要とされる社会情動的スキルを新しいスキルのフレームワークにどのように組み込むことができるかという問いも含まれている」*9とも述べられている。

ここで重要なのは、「学びに向かう力」が社会情動的スキルと同じ文脈で語られているところである。さらに、奈須正裕(2017)は『「学びに向かう力・人間性等」は、ほかの二つの柱と比べれば情意的な色彩がより強い学力側

面と言え(中略)教育的に育成が可能であり,また育成すべきであり,だからこそ学力論の中に正当に位置付け,評価の対象ともしていく^{*10}と述べている。

以上のことから,「学びに向かう力≒非認知能力」だといつてよいことは間違いないが,だとすれば,以下のような構造として「非認知能力」を捉える必要がある。

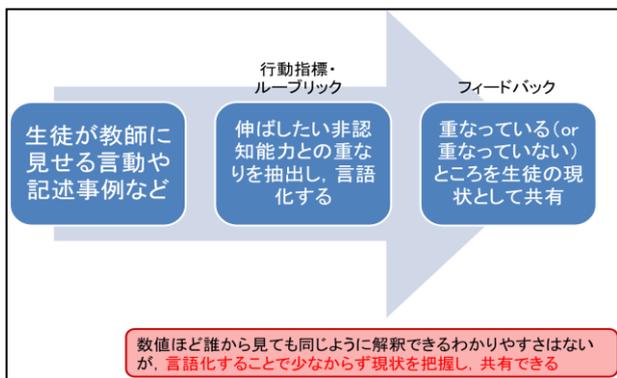


「非認知能力」と「主体的に学習に取り組む態度」の関係
非認知能力を高めるための営みを,確実に単元や題材の学びに組み込み,それに伴って伸びた力を,学習評価(主体的に学習に取り組む態度)の対象として見取っていくことが肝要であると考えます。「非認知能力」や主体的に学習に取り組む態度の評価についての詳細は以下に述べる。

2. 2. 5. 非認知能力と学習評価

「非認知能力」を育てるためには,適切なタイミングで,適切に評価(アセスメント)する必要があります。

指導者は,単元や題材の学習において,「伸ばしたい非認知能力」のイメージ(行動指標・ルーブリック)をつかっておく。しかる後に単元や題材の学びの途中や最後に生徒が見せた言動や記述と,最初につくったイメージとの重なりを抽出する。最後に,それを生徒の現状としてフィードバックする。その流れの一例が以下である。



非認知能力アセスメントのイメージ

指導者は,生徒の現状をフィードバックし共有すること

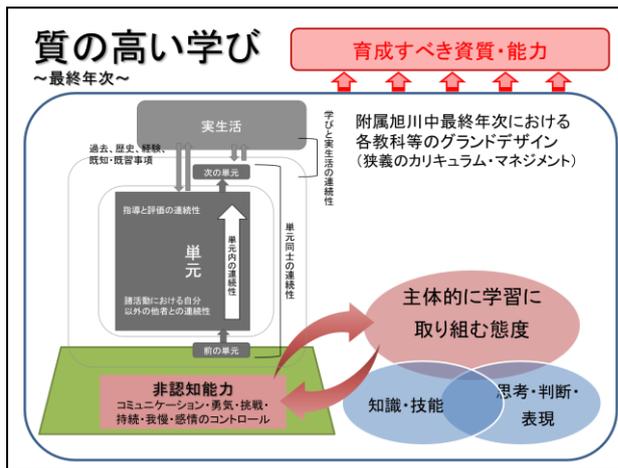
で,指導の充実・改善を図ることができる。これを,各単元や題材で形成的もしくは総括的に行うことで,生徒の「非認知能力」が育成されるものと想定している。

さらに,「2. 2. 4.」で述べた通り,「非認知能力」と「主体的に学習に取り組む態度」は包含関係にあると考えられるため,「非認知能力」を高めるための手立ては,ひいては各教科等の特性に応じた手立てへと具体化することで,「主体的に学習に取り組む態度」を育むための手立てとして昇華させることもできると考えられる。

2. 2. 6. 学びの質を高める「グランドデザイン」

ここまで,1・2年次の研究における成果や課題,そして昨今の時代の潮流や本校生徒の実態等について述べてきた。最終年次研究では,これらを総合的に捉え,研究を構造化することが重要であると考えます。

これまで述べてきたことを基に描いた研究構造図が以下である。



最終年次研究の構造図

これまでの2年間の研究では,ある程度ポイントを絞った中で,各教科等における学びの質を高めるべく,様々な手立てを講じてきた。

それを土台とし,最終年次では,単元・題材をパッケージ化して大局的に捉え,それを「グランドデザイン」というひとまとまりの学び(狭義のカリキュラム・マネジメント)として生徒に促すこととした。それがひいては学びの質の高まりにつながると考えたためである。

確かな「非認知能力」が礎となり,その上につながりをもった単元・題材がある。またそうして進行する単元・題材の学びにおいては,「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」が相互に関連付いて

おり、各教科等における資質・能力の育成へと向かう。

このグランドデザインが、生徒の学びの質を高めていくことを期待し、最終年次の研究を推進していきたいと考える。

3. 最終年次の主題・副主題

1・2年次研究で積み上げてきたことに加え、加速度的に変化する時代の流れや生徒の実態等を踏まえ、最終年次の副主題を以下のように掲げた。

研究主題
質の高い学びの創造(最終年次)
副主題
資質・能力の育成に向けた各教科等の学びのグランドデザイン

4. 各教科等の研究

本校の各教科等においては、先に示した研究構造図に即し、諸相における「連続性」や「非認知能力」に注目し、グランドデザインを描くことで、質の高い学びの実現に向けて研究を進めている。

グランドデザインとしてパッケージ化したものを基に、各教科等においては、単元や題材の学びを充実させるための手立てを講じながら、実践を重ねている。

以下に、各教科等の実践研究における具体を示す。

4. 1. 社会における「非認知能力アセスメント」の活用

本校社会科では、例えば「江戸時代に改革が繰り返されたのはなぜだろう?」というように単元の課題を設定し、諸事象(諸々の知識・技能)との関連の中で学習が進むよう工夫している。

例えば江戸時代の学習では、評価規準と目指すべき姿を示すとともに単元の課題を提示し、生徒は示された評価規準を意識しながら学習をスタートさせた。

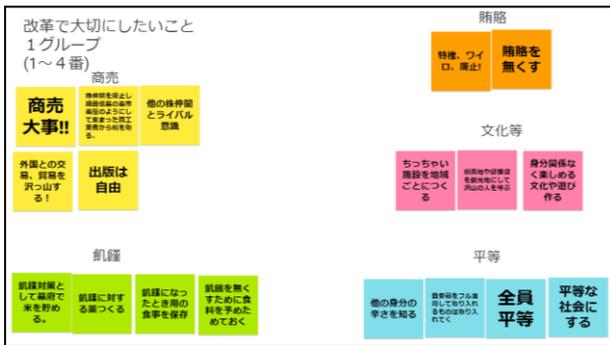
江戸時代に繰り返された改革の課題について、江戸幕府の支配や民衆・文化の動きと関連させて、よりよい社会の実現を視野に入れながら、主体的に追究しようとしている。

大切にしてほしい姿勢

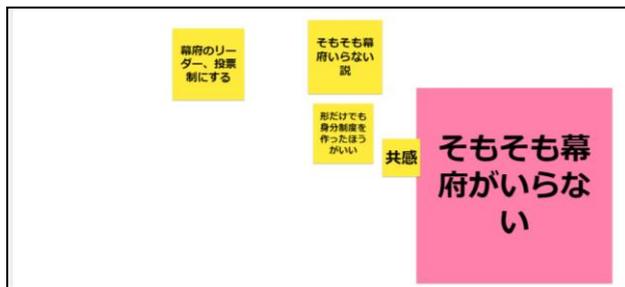
- 進んで周りの仲間に見解を求める
- 自分なりに単元の課題の解決に対して、方針をもって取り組む
- 授業の話し合いに積極的に参加しようという姿勢で取り組む
- 最後までよりよい社会の実現の方法を考えようという姿勢で取り組む

その際、江戸時代の産業と流通の発展について、「農村」「漁村」「都市」の3つのグループに分けて調査し、最終的に調べたものを全体でまとめ上げるという方略をとった。これは、「非認知能力」のアセスメント結果に基づき、本校でまとめた3つの力(本稿2. 2. 2.)のうち、とりわけ「他者と関わる力」にアプローチするためである。

なお、他者との関りの際、ICT の効果的な活用も行っている。以下に示したのは交流に用いた Jamboard の一例で、右下には「平等な社会をつくる」などの考え方が生徒から表出していることがわかる。



また、単元の課題「江戸時代に改革が繰り返された理由はなぜだろう?」について単元の終末部に個人で考察し、単元シートのまとめの記入を行い、まとめの内容について Jamboard を用いて全体で交流した。以下に示したのは交流の際に用いた Jamboard の一例である。



交流を行う中で、「江戸幕府は本当に必要だったのか」という問いを生徒自身が導き出すことにつながった。

単元の学習の詳細な流れについては本校紀要の社会科編に任せるが、本実践においては、最終的に以下のような「非認知能力アセスメント」が実施された。

	1	2	3	4
①答えが間違っていたり、周囲と違っても切り替えて学習に臨めた	69.5% (56.4%)	27.4% (37.2%)	3.2% (3.2%)	0% (3.2%)
②努力を知識・技能の向上や課題の解決につなげられた	64.2% (41.5%)	30.5% (42.6%)	4.2% (13.8%)	2.1% (2.1%)
③集団における自分の役割を考えながら学習できた	51.6% (45.7%)	28.4% (36.2%)	16.8% (18.1%)	3.2% (0%)

※1「とてもそう思う」、2「まあそう思う」、3「あまりそう思わない」、4「そう思わない」

※2 括弧内の数値は年度当初の数値である。

結果を見ると、①「自分と向き合う力」、②「自分を高める力」については向上が見られたが、③「他者と向き合う力」については大きな変化が見られなかった。

これをうけ、本校社会科では、以下のように本研究における実践を以下のように振り返っている。

①本単元での取り組みは「政治と諸事象の関係」という軸に基づいて単元の課題を追究していくという過程や、他者と交流をもつことで考えを深めるという点においては効果的だった

②生徒が役割意識を十分に感じられていないことから、役割分担をして行ってきた調査、発表などの活動のあり方には工夫の余地があるものと考えられる。

以上のことからいえるのは、「非認知能力」が心や振る舞い機能であるにも関わらず、その育成の如何によって学習の効果に大きな影響があるということである。

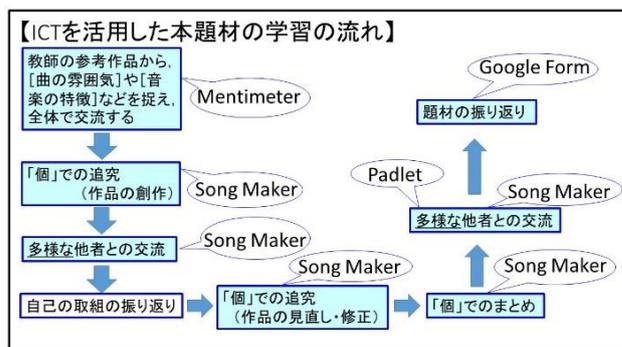
4. 2. 音楽における創作活動への ICT 機器の活用

本校音楽科では、特に「創作」の学習において、自分のイメージを生かして作品を創り上げるための道具として ICT 機器の活用に取り組んでいる。

創作のイメージを表すためには、「音楽を形づくっている要素」をどう工夫し具現化するかという視点が大切になってくるが、それは「表現」と「鑑賞」の学習を積み重ねることによって培われていくものである。つまり、曲を作る側と聞く側の相互作用によって成立するのが「創作」の学習であるといえる。

そのように考えた時、教室内の学習で重要になるのが生徒同士の交流場面をいかに設定するかである。自分の創作した作品が「音楽」としてどのように評価されるのか、他者の作品が「音楽」としてどのような価値があるのかを客観的に捉え、それらを自己の作品にいかに取り入れるか、という極めて複雑な営みが、生徒同士の交流で適切に行われる必要がある。

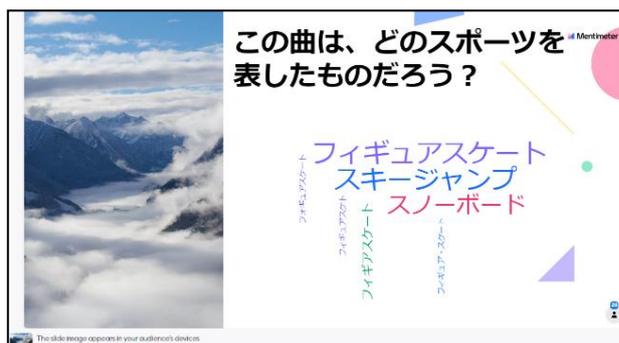
そこで、本校音楽科では、ICT を用いて交流することで、限られた時間の中で多様な他者との関わりをもつことができ、学びに広がりや深まりをもたせていくことができると考えた。そして、ICT の活用に関わっては、題材を通して、以下のような活用場面を設定した。



このように ICT を活用することで、限られた題材の時間で効果的に学びを進めていくとともに、何度も試行錯誤しながらよりよい表現を追究していくことができ、ひいては作品の質を向上させることができると考えている。

さらに本校音楽科では、Mentimeter や Padlet などのアプリを用いて、仲間との交流の工夫を行っている。

Mentimeter は、プレゼンテーションの途中で視聴者にタブレット端末等で簡単なアンケートに回答してもらい、すぐに結果を反映させることができるツールであり、以下は、Mentimeter を用いて行った交流の様子である。

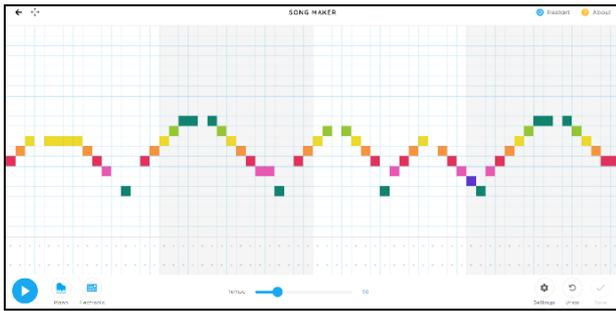


このツールを用いることで、例えば「16分音符を用いた細かいリズムで音をだんだん低くしていくとスキージャンプの滑走台を加速して滑っている感じがする」など、具体的な場面をイメージしながら「音楽を形づくっている要素」の視点から音楽の特徴と結び付けて考える姿が見られ、交流を通して創作の活動につながっていくものとなった。

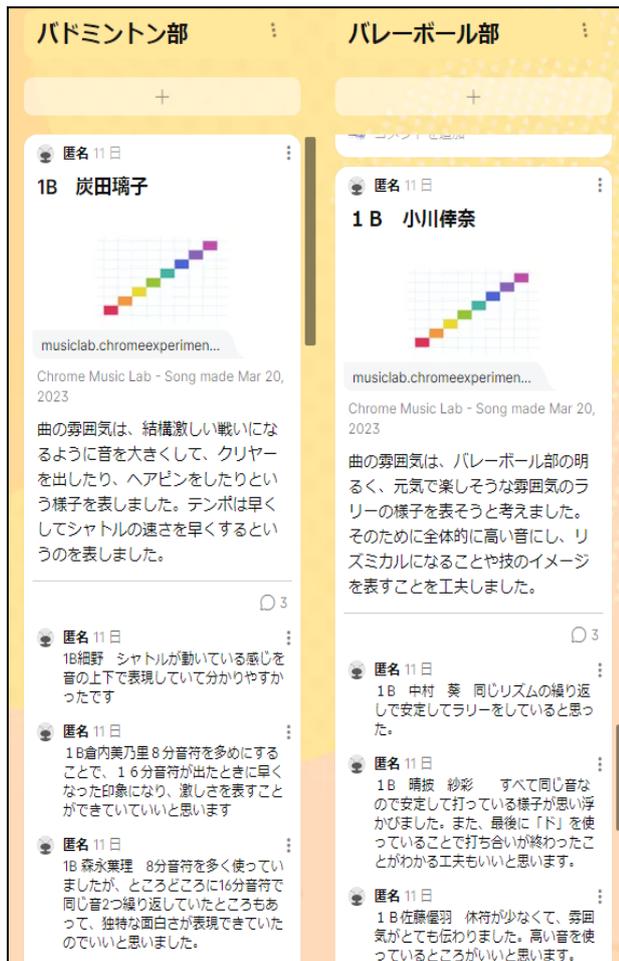
さらに、Padlet というアプリについてである。Padlet はオンライン上で使えるツールである。ひとつの画面に様々な人が文字を書いたり写真や URL を貼り付けたりでき、全体またはグループでのシェアが簡単であるため、グループワークや広くアイディアを出し合う活動などに最適である。

本校音楽科では、このツールと Song Maker (曲を創作するソフトウェア)を用いて、広く交流を行っている。

まず、Song Maker を用いてそれぞれが曲の創作をオンライン上で行う。



次に、オンライン上で作成した曲の URL を Padlet に貼り付ける。すると以下ようになる。



生徒たちは自ら設定したテーマに沿って Song Maker を用いた作品をつくり、その URL リンクを上部に貼る。ほかの生徒はそこをクリックして曲を聴き、コメントを書いていく。基本的なテーマは「自分の所属する部活動」であるが、選んだ部活動ごとにカテゴリを分けて作品を提示したことで、生徒は自分と同じ部活動を選んだ他者の作品を聴くことができ、同じテーマでも様々な表現の工夫をした作品をつくることができると学んだ。

今回の Padlet を用いた交流は、「同じ班以外の人とも

交流でき、自分のペースで何度も仲間の作品を聴くことができたため、雰囲気と工夫点の結び付きをより感じることができた。」「色々な人からのコメントで自分の作品の魅力が明らかになったので自信になった。次はこれを越える作品を作りたいという意欲がわいてきた。」など、生徒自身も交流の成果を実感したようである。

本校研究の視点でいえば、

- ①様々な ICT ツールを用いて実践を行った結果、創作が苦手な生徒にも自信をもたせることができ、自己有用感へとつながり、非認知能力を育成できた
- ②ICT 活用により、題材のつながりがスムーズになったことはもとより、生徒同士のつながりも円滑にすることができた

という大きく2つの成果が得られたといえそうである。

5. 今年次研究の成果と今後の課題・展望

これまで、各教科等の実践を交えながら、本研究の概要について述べてきた。それぞれの教科等で確かな成果が得られた一方で、新しい研究に向けての課題も明らかになった。

5. 1. 今次研究の成果

3年間に渡る今次研究では、「非認知能力」というものの必要性を認識し、その正体を明らかにして、非認知能力を育成することを土台としつつ、各教科等の実践を進めた。

またその際、当然のことながら各教科の本質である見方・考え方を働かせることのできる単元・題材づくりや授業づくりに取り組んだ。さらに、その単元・題材づくりや授業づくりの際に大切にしてきたことが「つながり」である。一単位時間どうしのつながり、単元間や題材間のつながり、教室での学びと実生活のつながり、共に学ぶ仲間とのつながり、他教科との横のつながり等、様々なつながりを意図して授業を組み立てた。

このようにして各教科等で作上げてきた授業では、確実に学びの質を高めることができたと考えられるし、この後に付されている各教科の紀要にもそのことが具体的に記されていることから、本研究の成果は明らかであるといえる。

6. 2. 今次研究の課題と新たな研究への展望

以上に述べた成果があった3年間の研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。

①「個」を高める学び

前述のように、本研究においては、様々なつながりの中で学びをデザインすることで、学びの質の高まりを確実に促すことができた。そのことは、各教科等において「知識・技能」や「思考・判断・表現」の高まりという側面にも少なからず表出している。

しかしその一方で、年度末に行った生徒へのアンケートでは、以下のことを課題として挙げている生徒が多かった。

- ・テキストを読み解く力が弱い
- ・学習のゴールを自分で設定できない
- ・自ら問題を見いだして解決できない
- ・学習の中で自分の長所を生かせない
- ・多面的・多角的に思考できない

これらはいずれも、これからの知識基盤社会を自らの力で生き抜く上で必要な事柄である。

これからの研究においては、「非認知能力の育成」は当然のこととして、さらに生徒の「個」の学びに目を向け、新しい未知の課題に試行錯誤しながら、生徒が学習者として自律的に学ぶことのできる環境を創出する必要があると考える。

②課題解決における他者との関わり

本研究においては、様々な教科等で「生徒同士のつながり」に着目し、実践を行ってきた。この視点における先のアンケートにおいては、生徒自身から以下のような意見が出ている。

- ・附属中の授業は人と話し合う場面が多くて楽しい
- ・人と話をする中で、自分では気付かなかったことに気付くことができた

これらは一見好ましい回答に見えるが、「教室内の学びが楽しい」とか「広く学べる」という領域を出ないとも見ることができる。

私たちが教室の内外で生徒たちを関わらせ、対話や協働を生みだそうとする時、そこに「協働する価値」を見いださなくてはならない。つまり、協働することなしには解決し得ない課題に取り組みせたり、先に述べた「個」による学びが協働することでよりブラッシュアップされ、

新しい価値が生まれるような仕掛けをつくったりしなくてはならないということである。

以上のことから、今後重要になってくるのは、①「個」を高めるための学びを保証しつつ②協働的な学びをいっそう活性化させることで、より真正な学びを生むことであると考える。

中教審答申における「令和の日本型学校教育」の構想(2021)においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められている。詳しくは新しい研究の総論に譲るが、いずれにしても、今次研究で目指した「質の高い学び」をさらに具体化し、生徒の「個」を重視しながら、その「個」どうしが関わり協働することで真正の学びへと向かう仕掛けづくりが、これから本校が目指していくべき方向であると考えます。

(研究部 嶋田 善行)

注釈

- *1 中央教育審議会答申.『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』本文.p17
- *2 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p3
- *3 文部科学省.「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」p6
- *4 本稿では、ゴールドバーグ,L.R,(1990)が提唱した人格の五因子モデルを参考にしている
- *5 小塩真司(2021)「非認知能力～概念・測定と教育の可能性」
- *6 ジェームズ・J・ヘックマン.「幼児教育の経済学」
- *7 「家庭・学校・地域社会における社会情動的スキルの育成～国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆」より一部抜粋
- *8 同上
- *9 同上(傍線は嶋田による)
- *10 奈須正裕(2017)『『資質・能力』と学びのメカニズム』(傍線は嶋田による)

参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」
- (3)文部科学省.「学習指導要領 解説」.2017
- (4)文部科学省.「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」.2018
- (5)文部科学省教育課程政策課編.「中等教育資料(令和元年10月号)」.学事出版.2019
- (6)文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター.「学習評価の在り方ハンドブック」.令和元年6月
- (7)中央教育審議会.「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す,個別最適な学びと,協働的な学びの実現～」.令和3年1月26日
- (8)国立教育政策研究所編.「[国研ライブラリー]資質・能力 理論編」.東洋館出版社.2006
- (9)田中耕治.「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」.ぎょうせい.2011
- (10)佐藤学.「質の高い学びを創る授業改革への挑戦」.東洋館出版社.2012
- (11)鈴木敏恵.「課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法」.教育出版.2013
- (12)溝上慎一.「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」.東信堂.2014
- (13)R.リチャート/M.チャーチ/K.モリソン.「子どもの思考が見える21のルーチン」.北大路書房.2015
- (14)梶田叡一.「アクティブ・ラーニングとは何か」.金子書房.2015
- (15)西岡加名恵/石井英真/田中耕治.「新しい教育評価入門 人を育てる評価のために」.有斐閣コンパクト.2015
- (16)ジェームズ・J・ヘックマン.「幼児教育の経済学」.東洋経済新報社.2015
- (17)西岡加名恵.「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」.明治図書.2016
- (18)岸学.「21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識,スキル,人間性,そしてメタ学習」.北大路書房.2016
- (19)奈須正裕.「『資質・能力』と学びのメカニズム」.東洋館出版社.2017
- (20)石井英真.「アクティブ・ラーニングを超える授業」.日本標準.2017
- (21)田村学.「深い学び」.東洋館出版社.2018
- (22)藤田由美子,他.「ダイバーシティ時代の教育原理—多様性と新たなるつながりの地平へ」.学文社.2018
- (23)北村友人/佐藤真久/佐藤学.「SDGs 時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を」.学文社.2019
- (24)中山芳一.「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」.東京書籍.2018
- (25)国立教育政策研究所.「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」.東洋館出版社.2020
- (26)北尾倫彦.「『深い学び』の科学」.図書文化.2020
- (27)小塩真司.「非認知能力～概念・測定と教育の可能性」.北大路書房.2021